中原中也

分銅惇作

中原中也
昭和四九年九月二〇日第一刷発行　昭和五〇年一二月二五日第四刷発行
著者——分銅惇作
©Junsaku Fundo 1974 Printed in Japan
発行者——野間省一　発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目一二番二一号　郵便番号一一二　電話〇三—九四五—一一一一　振替東京五九三〇
装幀者——杉浦康平　協力——辻修平
印刷所——凸版印刷株式会社　製本所——株式会社大進堂
●—定価はカバーに表示してあります　三五〇円
落丁本・乱丁本はおとりかえします（学1）

中原中也

分銅惇作

財団法人日本科学協会

[社]現代新書

目次

1——詩人の宿命とその郷土……7
1—聖なる無頼の詩徒　8
2—中也の詩碑と故郷　11
3—追悼詩「死んだ中原」　17
4—晩年の印象と病歴　24
5—故郷喪失者の嘆き　28
2——生い立ちと詩的体験……33
1—幼時体験と「生ひ立ちの歌」　34
2—〈家〉と「つみびとの歌」　39
3—初期短歌と見神歌　44

试读结束：需要全本请在线购买： www.er

3——青春と詩的出発……53
1—詩と青春の掟　54
2—富永太郎・小林秀雄との交遊　67
3—「朝の歌」の出発　75
4——『山羊の歌』の叙情……81
1—郷愁と倦怠の谷間で　82
2—愛と祈りのリリシズム　93
3—「白痴群」創刊と「寒い夜の自我像」　100
4—青春の挫折感と「汚れつちまつた悲しみに……」　105
5—「羊の歌」の述志　110
5——『在りし日の歌』の不幸……115
1—「含羞」の叙情　116

2—〈在りし日〉の時間意識 121
3—〈死〉の想念について 127
4—〈此の世の果て〉の認識 137

6——芸術論と晩年の詩境……141
1—〈名辞以前〉の世界 142
2—「言葉なき歌」のイメージ 152
3—愛児の死のころ 162
4—「冬の長門峡」の時間意識 171

7——詩人像とその位相……183
1—中也像のなりたち 184
2—交遊関係について 189
3—宮沢賢治の影響をめぐって 194

4—宗教意識をめぐって　201
5—詩的位相と影響　207
主要文献……211
あとがき……214
中原中也年譜……216

本文に引用の中也の作品、書簡などは、角川書店版『中原中也全集』に拠る。

1——詩人の宿命とその郷土

中原中也像（高田博厚作）

——結局は何もかも宿命だ。私は詩心のない人達を憎む。

（「精神哲学の巻」）

1――聖なる無頼の詩徒

若き詩人の最後

昭和十二(一九三七)年十月二十二日の真夜中、鎌倉の養生院という病院で、ひとりの詩人が死んだ。満三十歳の若さで、八方塞がりつくしたかのように静かに息を引き取った。病名は結核性脳膜炎。発病入院して半月後のあっけないような急死であった。

この詩人、中原中也の最後のころの姿を、友人のひとり青山二郎は追悼文「独り言」(「文学界」昭十二・十二)で、次のように描いている。

ハイ病院に馳け付けた時は、もう中原ではなくて、脳膜炎でした。ざふきんの様に使ひ荒されて、遂に我が手に掛けられ打捨てられて仕舞つた様な、今更はつと思ふやうな肉体が、置き忘れられたやうに寝てゐました。(略)枕元には懐中手をして突立つた、小林(秀雄)のしみじみと見下ろした姿があつた。無口でぎよつとした連続みたいな、河上(徹太郎)の顔があつた。大岡(昇平)、中村光夫の顔が二人の肩越しに見詰めてゐた。奥さんは胸の辺りをさすり、お母さんは手を取つて指を揉んでゐた。その母親の指を煙草を吸ふやうに指に挟んで、口に持つて行く、いまは悲しい中原中也の姿であつた。

これは死の二、三日前の様子だが、「ざふきんの様に使ひ荒されて、遂に我が手に掛けられ打捨てられて仕舞つた様な」という言葉は、この詩人の波乱に富んだ短い生涯の閲歴を知る者には、あまりに的確で、無残に思えてならない。弟思郎の証言（『兄中原中也と祖先たち』）によると、いまわの際にかすかに意識を呼び戻して、「僕は本当は孝行者だったんですよ」と母に言ったそうだが、中也の一生はいわば〈聖なる無頼の詩徒〉の宿命につらぬかれたものであった。

うちなる狂気の燃焼

中也は前年の十一月十日に長男文也を失い、悲嘆のあまり、精神に異常をきたし、この年の正月には千葉寺療養所という精神病院に一ヵ月ほど入院していたので、彼の死は狂死と噂された。中也の伝記研究に異様な執念で取り組んでいる大岡昇平は、中原家の血の名誉のために、この俗間の狂死説を否定することに努めているが、狂死は事実に反するにしても、一言で評するなら、中也は狂気と死に誘われた詩人であった。己れのうちなる狂気に導かれて、死を道づれにした人生の放浪者であった。彼の奔放な詩的エネルギーの核になっていたのは狂気とでも呼ぶよりしかたのない情熱であり、その作品には早くから夭折する運命の人に特有な不吉な死の陰影がかげっていた。詩にとりつかれた魂の不幸な様相を典型的に示していた。

元禄の俳人芭蕉はみずからを風羅坊と名づけ、「無能無芸にして、ただこの一筋につなが

试读结束：需要全本请在线购买： www.er

る」（「笈の小文」）と言ったが、詩の一筋につながる点では、中也も徹底していた。彼は詩を書くことよりほかにまるで何の能力もない人間であった。狂気にかられて、突っ走って、死のゴールさえ駆け抜けて、そのままぶっ倒れたみたいな短い生涯であった。一つの青春が詩とともに燃えつきた感じで、そこには晩年もなければ、円熟もないが、それでいて中途半端とは思えない完結性がある。その狂気は芭蕉の風狂の精神と似ていないこともないが、異質とみるべきであろう。伝統性とは縁のない無垢な無頼の精神が近代の泥にまみれているからである。

詩は宿命で、ほとんどのがれる術のないようなものであった。ボードレールはその有名なポー論で、詩人とは額に八方塞がりの烙印を押された者だと評したが、中也の額にも不幸な烙印があったに違いない。「芸術家は宿命的悲劇に晒されてゐる」というのは、彼の「芸術論覚え書」の言葉である。問題は認識することではなくて、身に負ったこの悲劇的宿命の重さにどのように耐えるかということである。彼は耐えることに愚直なほど誠実であった。結果は、自分の肉体を「ざふきんの様に」使い荒し、みずからの手で打ち捨てることにほかならなかった。無頼の詩人が聖者でありうるとしたらただこの誠実の一点においてであろう。

じつは心ない後世が、たとえ善良な敬慕の気持からにせよ、彼を聖者扱いしようものなら、あの世から「この俗物めが」とわめきかねないのが中原中也という詩人なのである。地下の彼は、たぶん「おれはただやりきれなかったのだ」とつぶやくだけだろう。彼が後世の知己に期

待するとしたら、そのやりきれなさの何分の一かを身にしみて思い味わってくれる、詩のすなおな読者の共感であろう。

2——中也の詩碑と故郷

これが私の故里だ　中原中也の故郷は古くから温泉地として知られる山口の湯田である。医院であった中也の生家は現在跡をとどめない。昭和四十七年五月、火災で焼失してしまった。生家のあったところから五十メートルほど離れたところに井上公園があるが、この小さな公園の真中ほどに中也の詩碑が建っている。黒御影石のりっぱな碑で、小林秀雄の筆で、中也の詩「帰郷」からとった詩句が刻まれている。

これが私の故里だ
さやかに風も吹いてゐる
あゝ　おまへはなにをして来たのだと
吹き来る風が私にいふ

原詩は昭和五年五月の「スルヤ」第五集と昭和八年七月の「四季」第二冊とに二度発表され、詩集『山羊の歌』の「初期詩篇」に収められている作品だが、四節十四行の後半部分によっている。「さやかに風も吹いてゐる」の次に「心置なく泣かれよと／年増婦の低い声もする」の二行があるが、小林の配慮で削除されている。生涯故郷をふかく愛し、しかも故郷にそむいた中也の詩魂を伝えるにもっともふさわしいことばであろう。前二行は故郷のさわやかな風に吹かれている優しい情緒を歌い、後二行では反転して「おまへはなにをして来たのだ」と東京での無為無頼の生活を自責するつらい思いを風に託している。

碑文は大岡昇平によって次のように誌されている。（文中ルビは編集部）

中原中也は明治四十年四月二十九日この地に近い湯田横町に生れた。その卓れた詩才は県立山口中学校に在学中から現はれてゐたが、昭和九年詩集『山羊の歌』が東京で出版されるに及び広く詩を愛する人々に認められるに到った。不幸病を得て、同十二年十月二十二日、第二詩集『在りし日の歌』の上梓に先立って、鎌倉の寓居に歿した。その名声は死後ますます高く日本近代詩史に揺ぎない地位を占めてゐる。この度山口市長兼行恵雄の斡旋により、同郷の有志、東京の友人ら相寄り、こゝに詩碑を立てゝ、その詩業を記念することにした。碑表の文字は詩篇「帰郷」より取られ、友人小林秀雄が書いた。

昭和四十年五月

友人　大岡昇平之を誌す

故郷喪失者

井上公園は幕末の七卿落ちで有名な高田御殿の跡地で、中也詩碑のかたわらには明治の元勲井上馨の記念像がいかめしく立っている。また同じ公園の片隅には放浪の俳人としてこの地に寄留した種田山頭火の、「ほろほろ酔うて木の葉ふる」の句碑もある。以前、この地を訪ねたおり、ちょうど桜の花びらの散る季節だったが、私はまだ人影もない早朝の公園にたたずみながら、俗と反俗の精神を同一次元に風化してしまう時間のからくりが魔法めいたものに感じられ、つくづくと詩人の宿命とその郷土との関係のふしぎさに思いをいたさずにおられなかった。

中原中也は生前故郷に受け容れられるような人間ではなかった。いわば人生の落伍者であり、故郷喪失者であった。長男でありながら父の葬儀にも参列することができない無頼な男であった。が、中也の詩の魅力のひとつは、この拒まれた故郷の自然に根深くつながっている土着的な叙情精神である。と思うと、改めて中也にとって詩とは何か、故郷とは何であったか、と問い直さずにいられなかった。さやかな風の中から、「美とは、宿命である」「生活が拙いといふことは、断じて芸術が拙いといふことではない」「芸術家は宿命的悲劇に晒されてゐる」などという中也の芸術論にちりばめられた言葉のいくつかが、きれぎれに思い浮かびくるので

あった。いや、それ以上に私にとって中原中也という詩人は何であったのかと自問自答せずにいられない気持ちで、この詩人との出会いの遠い記憶を呼び戻していた。

中也との出会い

出会いといっても、私が生前の中原中也を知っていたわけではない。私が詩の読者として成長したころ、すでにこの詩人は死んでいた。私が田舎の中学校から東京に進学したのは、戦争末期であるから、中也が死んだ数年後である。田舎で素朴な詩の読者として藤村詩や白秋詩を愛読し、新しいところで高村光太郎、萩原朔太郎、千家元麿といった大正期の詩人より知らなかった私が、中也の詩を初めて読んだのは上京後である。学校の寄宿舎の図書室の本棚に一冊の詩集があった。それはまともな中也詩集ではなく、『現代詩集1』(昭十四・十二)という河出書房刊のアンソロジー(名詩選)であった。高村光太郎、草野心平、蔵原伸二郎、神保光太郎らと並んで中也の詩が三十編ほど収められていた。私はたちまち中也の詩の魅力にとらえられてしまった。日本語でこんな美しい詩が書けるのかと、目をみはる思いで、「朝の歌」「臨終」「妹よ」「寒い夜の自画像」「汚れつちまつた悲しみに」「曇天」「一つのメルヘン」などの気に入った作品を丹念にノートに写し取った。それは自分の粗野な詩的感覚が磨かれるような発見のよろこびであり、感動であった。しかし私は中原中也がどういう経歴の詩人であるのか、まったく知らなかった。

その後ほどなく、中也の詩集『山羊の歌』を所持している先輩を知り、中也の常軌を逸した

生活のエピソードを聞いたりした。戦後、高橋新吉、神保光太郎などの詩人と親しくなってから、中也が『ダダイスト新吉の詩』の影響から出発したことや、私が読んだ『現代詩集』の中原中也篇を編んだのが神保光太郎であったことなどを知って、急に中也に親近感みたいなものを感じたりした。

だが、なんといっても私に中也の詩人像を鮮烈に印象づけたのは、大岡昇平が編集した創元社版『中原中也詩集』(昭二二・八)の魅力であり、小林秀雄の「中原中也の思ひ出」(「文芸」昭二四・八)の筆力であった。その後、最初の『中原中也全集』(昭二六)三巻が創元社から刊行され、大岡昇平の精力的な評伝研究が発表されるようになって、どれほど恩恵を受けたかはかりしれない。

永遠の詩人中也

この十年来、毎年学生と近代詩を読むようになって、学期始めに学生の希望する詩人を調査するならわしになっているが、中也に対する人気はつねに上位を占めるのである。若い人にとって、中也はすでに古典的な永遠の詩人といってよい。中也の何がなぜこんなに青年たちをひきつけるのかと考えながら講義する私にとっても、中也の魅力は年ごとに深まるばかりである。私はいつも原点をふりかえるつもりで、中也との出会いの思い出、その詩をノートに写しとった日の遠い感動をたしかめることにしている。

文学研究者のはしくれでありながら、私は出不精で、文学散歩などという趣味をあまり持っ

试读结束：需要全本请在线购买： www.er